

# クリストファー・ロビン, レベル0, 1, 2

——『プー物語』における世界の枠組み——

棚 瀬 江里哉

## クリストファー・ロビン, レベル0, 1, 2 ——『プー物語』における世界の枠組み——

棚瀬 江里哉

### 目次

- I. 作者の語り
- II. クリストファー・ロビン, レベル0, 1, 2
- III. 森の魔法の場所

### I. 作者の語り

『プー物語』(本稿では『クマのプーさん』とその続編『プー横丁にたった家』を合わせて、便宜上『プー物語』と呼ぶことにする)の基本的な作品世界の設定は、作者が息子クリストファー・ロビンにお話ししてあげている架空の世界ということであり、その世界の中では息子のぬいぐるみたちが生き生きと活躍するのである。

『クマのプーさん』冒頭の挿絵ではプーはクリストファー・ロビンに手を引かれ「頭を階段にぶつけながら」おりてくる。「二階からおりてくるのに、クマくんは、こんなおりかたつきり知らない」のである(p.15)。すなわち、この冒頭の部分ではプーはあくまでもぬいぐるみであり、自分では動くことができず、話をすることもできない。

そして父(=作者)がお話を始める。するとお話の中のプーは生きており、話し、食べ、その他さまざまなお話を始める。すると、この枠組みはファンタジー文学にしばしば見られる、現実の日常の世界からある通路を通して非現実的な向こうの世界へ行くというパター

ンの一つと考えることができる。日常のこちらの世界、ぬいぐるみはぬいぐるみでしかない世界から、動物たちが話し、活躍する世界へ入り込む、その通路が作者の語りというわけである。

プーが出てくるお話をしよてやってくれと息子に頼まれた「わたし(=作者, 語り手)」は話し始める。

『じゃ、やってみようかね。』というよう  
なわけで...やってみました。

\* \* \*

むかし、むかし、大むかし、この前の金曜日ごろのことなんだがね、クマのプーさんは、森の中でただひとり、サンダースという名のもとに住んでましたとき。

(pp.16-17)

こまかく言えば上のアスタリスク3つ(原文のママ)の部分が象徴的に通路を表す。しかしおもしろいのは、いったん物語世界に入ったのだが、この直後に括弧書きで「名のもとになって、なに?」とこちら側のクリストファー・ロビンが介入してくる。まだ完全には向こう側に入り込んでいない、あるいは通路通過中、といった解釈ができるであろう。

ともあれ、この第1話における(向こう側に関する)父のお話の終わりとしてそれに続く部分を見ると、

…そこで、プーという名前がついたのだと、わたしは思うけれど、どうかな。

\* \* \*

「それで、お話、おしまい？」とクリストファー・ロビンがききました。

(p. 38)

となっており、やはりアステリスクによって象徴的に示される通路を通して (= 作者が語り終わり) こちら側に戻ってきたことがわかる。そして第1話全体の終わりの部分では

クリストファー・ロビンは、うなずいて出ていきました。そして、すぐ、クマのプーさんが、クリストファー・ロビンのあとから、パタン、パタン、パタン、パタンと、階段をのぼっていく音が、きこえてきました。

(pp. 40-41)

となっており、ぬいぐるみのプーがクリストファー・ロビンに引かれて、頭を階段にぶつけながら戻ってゆく。

ちなみに『クマのプーさん』最終話でも父のお話が終わり、アステリスクを経てこちら側に戻り、さらには上の pp. 40-41とまったく同じ言葉づかいで作品が閉じられている (pp. 252-253)。すなわち、第1話及び作品全体としては、「こちら側→向こう側→こちら側」という枠組みが明示されている。しかし実は、物語全体の残りすべてが基本的には向こう側だけのお話になっており、語り手もこちら側のクリストファー・ロビンも登場しないことにも留意すべきである。

## II. クリストファー・ロビン、レベル 0, 1, 2

今「こちら側」のクリストファー・ロビンと述べたのは無論「向こう側」にもクリストファー・ロビンが存在するからである。先項

では動けないぬいぐるみのプーと、父のお話の世界の中のキャラクター、主人公として活躍する二とりのプーがいることを述べた。さて、プーが登場する父のお話の中に、何と自分自身も登場したときのクリストファー・ロビンの驚きとおそらくは喜びはいかばかりであっただろう。第1話の父のお話がかなり進んだ時点である。

そのとき、プーの頭に、まず浮かんだのは、だれだったかという、それは、クリストファー・ロビンでありました。

(「それ、ほく？」クリストファー・ロビンは、とてもほんと思えないように、おそるおそるききました。

「きみさ。」

…)

(pp. 24)

もうすでに物語の世界にすっかり入り込んでいるはずなのにまた、言わば、現実に引き戻されたのは物語内のそのできごとがあまりにも驚くべきことであり、かつ現実の自分とも直結していることだったからであろう。

かくして、クリストファー・ロビンも二とり存在することになった。父の話を知っているこちら側のクリストファー・ロビンと父のお話の中に出てくる向こう側のクリストファー・ロビンである。両者を区別するために、こちらのクリストファー・ロビンを「クリストファー・ロビン、レベル1」、むこうのクリストファー・ロビンを「クリストファー・ロビン、レベル2」と呼ぶことにしよう。とすると、当然こちら側のぬいぐるみは「プー、レベル1」、お話の中で活躍する向こう側のキャラクターは「プー、レベル2」ということになる。(注：以降、煩雑さを避けるために、「～、レベル～」の「、レベル」を原則として省略。「プー2」のように表す。)

ところが複雑なのは、クリストファー・ロ

ピンは『プー物語』の実作者 A. A. ミルンの実際の息子の名前でもあるということ, すなわち、『プー物語』という作品世界の中での「こちら側」だけではなく, 本当の「こちら側」の实在の人物であるということである。この实在のクリストファー・ロビンを「クリストファー・ロビン, レベル0」と呼ぶことにしよう。良く知られた話であるが, クリストファー・ロビン0のお気に入りのクマのぬいぐるみの名前がプーであった。いうまでもなく, 「プー0」である。さらには, ほかのぬいぐるみたち, 「コブタ0」, 「カンガ0とルー0」なども実在したことが知られている。

ちなみに, 『クマのプーさん』ラストの挿絵では冒頭の挿絵では描かれていなかったぬいぐるみたち, コブタ1やカンガ1などが少し見えている。彼らが語り手のお話の中では登場人物たち, レベル2として生きて活躍するのである。

作者を中心に考えると以下のようになる。『プー物語』は实在の人物である A. A. ミルン(作者0)が息子クリストファー・ロビン0に, ぬいぐるみ0たちを登場人物としてあげたお話がもとになっている。なお, 伝記的事実として, もともとはクリストファー・ロビン0がぬいぐるみ0たちと一人遊びをしていたのだが, 母と乳母と一緒に遊んでくれるようになり, さらにはプロの文筆家であったミルンがお話をしてあげるようになったということである。さて, 作者1は『クマのプーさん』内の語り手であり, 父1でもある。しかし名前は実は出てこない。さらに, 作者2は存在しない。作者1のお話の中の世界では人間はクリストファー・ロビン2だけである。

今度は「世界」という観点からまとめると, 現実世界0には作者 A. A. ミルンと息子クリストファー・ロビン0, さらにぬいぐるみ0たちがいた。一つ付け加えると, ウサギ0とフクロ0はおらず(=ぬいぐるみは実在せず), 彼らはお話に合うようにミルンが考え

出したキャラクターである。

『クマのプーさん』の作品世界1には作者1(名前無し)がいて, 息子クリストファー・ロビン1にぬいぐるみたち, 特にプー1を中心にしてお話をしてあげた。

作品世界2は作者1のお話の中の世界で, プー2やクリストファー・ロビン2たちを中心に森の仲間たちが楽しく暮らしている。

### Ⅲ. 森の魔法の場所

今までは『クマのプーさん』を中心に見てきた。さて続編『プー横丁にたった家』には『クマのプーさん』とはっきり違う点がある。それは, 今までの言い方で言えば, レベル1が表れないことである。たしかに前編でも物語の大半はレベル2の森の中だけのことであった。しかし, 枠組みとしてはっきり, 作品冒頭と作品ラストにはレベル1が描かれていた。それに対して続編の方は基本的にレベル2だけである。ではその作品世界の設定はどうなっているのか。

この点に関して興味深いのは作品の終末部である。最終話はこうはじまる。

クリストファー・ロビンは, いってしまうのです。なぜいってしまうのか, それを, 知っている者はありません。なぜじぶんが, クリストファー・ロビンのいってしまうことを知っているのか, それを知るものさえ, だれもないのです。

(p. 245)

さらには, クリストファー・ロビン自身がそのことをうまく説明できない。ラスト近くの彼のことばによると,

「ぼく—あのね, ぼく—プー！」

「クリストファー・ロビン, なに？」

「ぼく, もうなにもしないでなんか, い

られなくなっちゃったんだ。」

(p. 265)

しかし、その後も黙り込んだり要領を得ない説明しかできない。

「プー。」と、クリストファー・ロビンはいっしょうけんめい、いいました。「もしぼくが— あの、もしぼくがちっとも—」ここでことばが切れて、クリストファー・ロビンは、またいいなおしました。「たとえ、どんなことがあっても、プー、きみはわかってくれるね?」

(pp. 266-267)

「もうなにもしないでなんか、いられ」ない、さらには「どんなことがあっても」、これらの言葉は何を意味しているのだろうか。これらを考える上で重要なかが第5話「ウサギがいそがしく働いて、クリストファー・ロビンがお昼まえになにをするのかが、みんなにわかるお話」の中にある。

近頃午前中にはクリストファー・ロビンに会えないことをいぶかる動物たちにイーヨーが教える。

「午前ちゅう、クリストファー・ロビンが、なにをするかと?あの人は学問をしとるのじゃ。あの人は教育をうけとるのじゃ。」

(p. 142)

その教育とは、ある形の棒3本は「A」の字を表すというようなことである。

「もう何もしないでなんかいられない」、これは学問、教育、勉強に触れ始めた幼い子供の言葉であろう。では「どんなことがあっても」とは?ここでテーマとなっているのは幼い子供の成長だと考えて良いだろう。何も考えずに自由に過ごしていた幼年時代。しかし勉強も始め、成長していく。するとどうな

るか。かつてはぬいぐるみたちと楽しく遊び、彼らを主人公とした父のお話を夢中になって聞いていた。しかしそんな幼年時代は否応なく過ぎてゆき、あんなに仲が良かった動物たちとも疎遠になって行く。

本稿の言葉を用いるならば、クリストファー・ロビン0は成長し、父のお話を聞くことがなくなっていく。クリストファー・ロビン1に関しても同じことが起きることが容易に想像される。そして、お話内の、向こう側の人物として、本来時間から切り離され、物語内の永遠の子供としてとどまるはずだったクリストファー・ロビン2にもその影響が表れ、森の動物たちとずっと仲良しのままではいられずいってしまうことになる。つまり、先ほどの「どんなことがあっても」を言い換えるならば、「ぼくが君たちのことを忘れても」とか「君たちと仲良くできなくなっても」というようなことと考えられる。

しかしそれもまだ物語の本当のラストではない。一番最後にはクリストファー・ロビンはプーを誘う。

「さア、いこう」

「どこへ?」

「どこでもいいよ。」と、クリストファー・ロビンはいいました。

そこで、ふたりは出かけました。ふたりのいったさきがどこであろうと、またその途中にどんなことがおころうと、あの森の魔法の場所には、ひとりの少年とその子のクマが、いつもあそんでいることでしょう。(p. 267)

この「森の魔法の場所」は、お話の中の森を出て行ったふたりがいる場所なのだから、作品世界レベル2でもない。いつまでもいられる魔法の場所であり、さらには、『プー物語』を心に留めているすべての読者たちの心の中ともとらえられるかもしれない。そして

本稿の言葉づかいで言えば, それを「世界レベル3」と呼ぶことも可能かもしれない。

[付記]

- ・本稿は2009年度北星学園大学公開講座「通路を抜けると...～英国ファンタジーにおける『こちら』と『向こう』～」, 及び日本児童文学学会北海道支部2010年度7月支部例会における口頭発表「クリストファー・ロビン, レベル0, 1, 2...」をもとに構成したものである。
- ・引用とページ数はすべて岩波少年文庫版『クマのプーさん』と『プー横丁にたった家』(ともにA.A.ミルン作, 石井桃子訳)による。

[Abstract]

## Christopher Robin, Level 0, 1, 2 : The World Framework of the Pooh Stories

Eriya TANASE

One peculiar thing about *Winnie-the-Pooh* is that the main story is actually told by the narrator to his young son. Furthermore, Christopher Robin, the narrator's son, is also a character within the story told by his father. Also, the stuffed animals that Christopher Robin cherishes become alive in father's stories. What is more complicating, the original Pooh stories were stories told by the author, A. A. Milne, to his real life son, Christopher Robin. So there are, as it were, three Christopher Robins : (1) A. A. Milne's son, (2) the narrator's son in *Winnie-the Pooh*, and (3) the character within the story, who lives by himself in 100 Aker Wood. This paper aims to clarify the complex relationships between these three, and explain the world framework of the Pooh stories.